



# おじさんズ通信

2021年6月号 (No.7)

発行元：登別市新生町4丁目桃柿通

緑風舎

発行者：おじさんズ3号

## 恩師が翻訳したバチエラーの遺稿

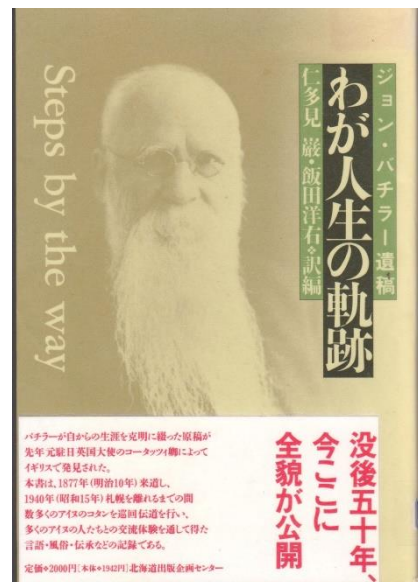
「担任だった先生が翻訳した本、知ってるか」

高校時代の級友が発したその一言を耳にしなければ、後々、手にすることはなかっただろう1冊の本がある。

仁多見巖・飯田洋右訳編「ジョン・バチエラー遺稿 わが人生の軌跡」(北海道出版企画センター)。担任とは室蘭工業高校時代、3年間代わらずクラスを受け持ってくれた飯田先生を指す。敬けんなクリスチャンであることは、クラスの誰もが知っていたが、まさかアイヌの父とも呼ばれ、登別市史にも頻りに登場する英国人宣教師の遺稿を翻訳していたとは一。すでに数年前に他界した恩師の、真摯な横顔が浮かんだ。

もう一人の仁多見氏も略歴に室工高勤務とあり、バチエラーに関する著書が多い。名前はおぼろげに残っているが、はっきりとは思い出せない。2人とも北海道キリスト教史研究会員とある。本は札幌西陵高教諭時代の1993年10月に発行されている。

「幌別村男爵伝」(文芸のぼりべつ39号)を書くに当たって、登別の町史や市史、関連資料を漁っていると、必ずジョン・バチエラー夫妻や、幌別での生活を支えたアイヌの金成喜蔵やその息子の太郎、愛隣学校などの名が登場する。夫妻が養女や召使とともに明治19年から、札幌に転居するまでの7年間住んだ青葉町の吉鷹牧場高台の住宅跡には、次のような案内板がある。



「1886年(明治19年)キリスト教布教のため函館から幌別に來住したジョン・バチエラーとルイザ夫人、養女キン、召使パラピタ夫妻の五人が、1893年(明治26年)札幌に転居するまで生活した邸宅跡で、此処の牧場で牛を飼い、乗馬で村内の伝道に出かけ、アイヌ語文典、蝦和英三対辞書の刊行、幌別村に愛隣学校を創立するなどの活動をすすめた。(後略)」

この本の存在を教えてくれたクマ(愛称)は今、知里幸恵「銀のしずく記念館」でボランティア・ガイドをしている。その関わりから手にしたのであろう1冊には、自分にとって地域史を更に深掘りさせてくれる箇所がいくつもある。例えば、アイヌの筆頭格で一時は、かなりの財をなし、最後は和人にだまされ没落した金成喜蔵の終の棲家はどこだったか。文中に謎解きのヒントが垣間見られる。

生意気盛りの教え子たちより13歳上だった担任は、教師と生徒という関係以上に泰然とした包容力を持ち合わせていた気がする。離蘭後の転勤先の札幌で、信仰心に裏打ちされた翻訳作業にコツコツ取り組む姿を思い浮かべると、「探求心を更に一歩前へ」の声が聞こえてくる。書を通じた恩師との邂逅に、ハレルヤ!

## 誕生日をめぐるミラクル

### ミラクル其の①

昭和23年5月XY日生まれの団塊世代だが、今年の誕生日3日前に、最初のミラクルは起きた。

子ども劇場の鑑賞例会がコロナ禍で中止になり、せっかくだからと、少数会員による劇団との交流会が開かれた。劇団といってもメンバーは岐阜県中津川を拠点に全国を回るご夫婦2人。上演予定だった作品のQ&Aなど織り交ぜた交流が終わり、ご主人と私的な会話をしたら、あれ? 同じですね~

まず、生年月日がピッタリ一致したからビックリ。初めての経験だ。高校も岐阜県の工業高校卒で、学科も室工時代と同じ電気科、おまけに、演劇の道を目指すきっかけになったが、東京演劇アンサンブルの「グスコブドリの伝記」を観て感動したからだという。

私もまた、室蘭で地元劇団の手伝いをしていたとき、舞台のそでから、来蘭公演された「グスコブドリの伝記」を観て感動したのを覚えている。

「いや~、奇遇ですね」。別れ際、グータッチならぬ右腕の前腕タッチで“握手”。忘れられない一日になった。

## ミラクル其の②

「Tさん、ついに来ました！」

ガラケーが鳴り、元職場の同僚のGちゃんが電話の向こうから興奮気味に切り出した。演劇人とのミラクル遭遇から5日後、誕生日2日後の土曜昼下がりがだった。

競馬が趣味の彼は土、日曜だけの勝負師だが、大金は賭けない。そして、1年前から自分の予想とは別に、私の誕生日の数字「5」「X」「Y」のみの三連複馬券を、中央競馬のメインレースで週1回買ってきている。くれている、というのは、出資者が彼だからで、私の懐は痛まない。なぜ？ G氏いわく、「やりたいから」。

で、とうとう「来た」のだ。新潟のレースで5、X、Yの万馬券が！

「山分けしましょう。なかなかない幸運だから」と、金脈を掘り当てた喜びに浸る彼に、「何もしていないのに、もらう訳には…」と断りつつも、最後は諭吉券を笑納してしまった。何枚だったかはヒ・ミ・ツ。

\*\*\*\*\*

## 半田ごてを握る

かつての仕事関係から知り合いになり、もう20年以上の付き合いになる横浜在住のIさん。ヘナチョコ記者時代の夢を見てうなされたことを先月号に書いたら、同じ経験ありとのメールが届いた。

長野五輪の技術キャップだったとき、夜中に「あれをまだやってなかった。まずい！！」という思いで「あーっ」という声と共に夢から覚め、跳び起きたという。共同通信社の技術部長もこなした人だが、「これがブレッシャーか」と初めて認識したとか。

そんな技術者の便りに触れ、物置から取り出したのが半田ごてと糸半田。長年使ってきたレコードプレーヤーの異音と出力コードの半断線状態退治に、やっと腰を上げた次第。

プレーヤーは2000年発売のA IWA製。プリメインアンプは、さらに27年さかのぼる1973年発売のTechnics製。今も、ばっちり働いてくれるから、質素儉約を旨とする年金生活者にとってはこの上なく堅牢、高品質なる古き良き時代の宝物だ。

しかし、半田ごてを手にして、思い出すことがひとつある。初めての就職先だった日立の関連会社で、大型コンピューターの保守作業をしていた。昭和四十年代半ばのことで、トラブルが起きると、回路図にとらめっこしながら、不良箇所を探し出し、半田ごてで



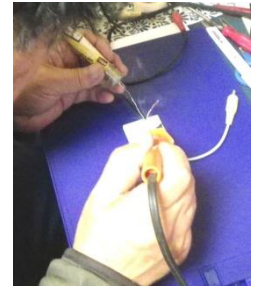
部品をチマチマ取り換えていたが、アメリカはすすんでいる。

「おい、IBMはフレームコンピューターの不良箇所を見つけたら基盤ごと引っこ抜いて、そっくり取り換えるらしい」

「すごいぜ、それもプログラムを走らせて、不良箇所を見つけ出すんだと」

日本のケチケチ竹槍精神と、米国式ダイナミズムの違いは戦後も続いていた。

まあ、それは業界のハナシでして、今も我が家の半田ごては珍重されており、半断線も解消し、異音も潤滑オイルスプレーを丁寧にかけたら、雲散霧消しました。メダタシ、メダタシ。



このご時世に合わせた「お庭で一人夏祭り」。パソコンのYouTubeで音楽を流し、発泡酒で独りカンパ〜イ。最近のノートPCはバッテリーが長持ちします。BGMの最後は北海盆歌ではなく、シヨスターコピッチの「セカンドワルツ」でめしました。

## 薫風 烈風

▶「アイOO」シーリングライトのその後レポートです。借りてきた洋画の日本語吹き替えで画面の女性が「愛×△●○」と言うと「ピピッ」と反応。カミさんが電話で話していて「あら！ ×△●○」と言ったら「ピピッ」。この音声認識技術、進歩しているのか、退化しているのか、とんと分からぬ。

▶ともあれ、今月も無事「おじさんズ通信」お届けできそうです。皆さん、お元気で〜。